Techno-Ocean News

TON Techno-Ocean Network

www.techno-ocean.com

July 2009

NO.34

CONTENTS・――・目次

日仏海洋学会：Techno-Ocean の共催に向けて
日仏海洋学会長（独立行政法人海洋研究開発機構 理事）今脇　資郎 …… 1

「国際みなとまち大学リーグ」国際セミナーの開催
横浜国立大学国際社会科学研究科 教授 池田　龍彦 …… 2

函館国際水産・海洋都市構想
函館国際水産・海洋都市推進機構 機構長 伏谷　伸宏 …… 3

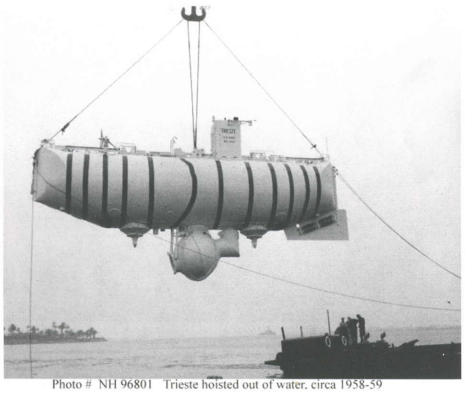
第３回水中ロボットフェスティバル開催報告
水中ロボフェス実行委員会幹事（大阪府立大学・准教授）有馬　正和 …… 4

日仏海洋学会：Techno-Oceanの共催に向けて

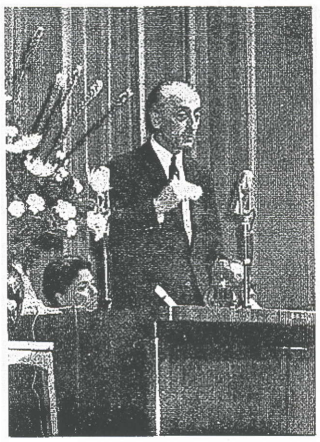
日仏海洋学会長（独立行政法人海洋研究開発機構 理事）今脇（いまわき）　資郎（しろう）

日仏海洋学会は、海洋や水産の分野で活動している日本とフランスの科学者や団体の学術交流を促進することを目的として、1960年（昭和35年）4月に創立されました。

「日仏」海洋学会とは何だろうと思われる方も多いと思います。名前のとおりフランスの海洋学と深い関係があります。学会の発足に先立つ1958年5月にフランスのバチスカーフ（有人深海調査潜水艇）F.N.R.S. Ⅲ号が初めて来日しました（写真１）。当時、日本では、深海調査は技術的に極めて難しく、人が深海に潜るのは、かなわぬ夢でした。そのようなときに、学術的にも貴重な資料が得られる深海調査という分野に立ち向かったフランスの姿勢に刺激され、それに協調することを目指して本学会は発足しました。このような経緯から、発足以来、深海研究に関するシンポジウムを定期的に催したり、フランスから科学者を招聘して講演会を行ったり、精力的に活動してきました。特に1965年6月には本学会の招請により、映画「沈黙の世界」で有名なモナコ海洋博物館長のクストー教授（当時）が来日し、シンポジウム、講演会、映画会などを行いました（写真２）。



（写真１）1958 年に来日したバチスカーフ



（写真２）1965 年に来日して久保講堂で講演するクストー教授（当時）

1983年からは、ほぼ隔年に日本とフランスで交互に日仏海洋学シンポジウムを開催しています。昨年（2008年）は第13回のシンポジウムを9月にマルセイユとパリで開催しました。日本からの約40名を含む総勢200名にのぼる研究者が参加しました。

来年（2010年）は10月に神戸で、テクノオーシャン・ネットワーク主催で開催される総合国際コンベンション「Techno-Ocean 2010」の一環として、第14回日仏海洋学シンポジウムを開催します。これは、この年に創立50周年を迎える学会の創立記念大会でもあります。

学会は現在約250名の会員によって次のような活動を行っています。(a) 学術研究発表会を毎年6月に日仏会館（東京　恵比寿；http://www.mfjtokyo.or.jp/；写真3）で開催しています。(b) 機関誌“La mer”（うみ）を年4回（全250ページ程度）発行し、会員のほか国内外の主な学術機関（海外10か国の50機関を含む）に送付しています。(c) 学会賞（1966年創設）と論文賞（2002年創設）を毎年授与しています。(d) 次に紹介します日仏関連学会による学術シンポジウムに参加するほか、各学会と共催してワークショップや講演会を開催しています。また、日仏会館による日仏学者交換制度により、日本人研究者のフランスへの派遣やフランス人研究者の日本への招聘を実施しています。

(写真 3)日仏会館

学会は、日仏会館を拠点とする26にのぼる日仏関連学会の一つとしても活動しています。日仏関連学会は、人文・社会・自然科学及び医学、農学、工学などのあらゆる分野の学会で構成されています。昨年（2008年）は、江戸時代末期の1858年に日仏修好通商条約が締結され、日本とフランスの交流が開始されて150年に当る記念の年でしたので、日仏関連学会は、9月に3日間にわたって日仏会館で「日仏交流150周年記念 日仏関連学会総合シンポジウム 日仏学術交流のルネッサンス」を開催しました。日仏会館は、集会を開いたり図書室やレストランを利用できるなど、会員のサロンでもあります。

このほか学会の詳しい活動についてはホームページをご覧下さい（http://www.soc.nii.ac.jp/sfjo/）。

「国際みなとまち大学リーグ」国際セミナーの開催

横浜国立大学国際社会科学研究科 教授 池田（いけだ） 龍彦（たつひこ）

図 1：国際みなとまち大学リーグのロゴマーク

開港 150 周年を迎えた横浜において、5 月 21・22 日に「国際みなとまち大学リーグ」国際セミナーが開催されました。「港は世界の文化文明のゲートウェイ」をテーマに、9 カ国 10 大学のメンバーをはじめ、延べ 200 名を超える国際色豊かな参加者が一体となって活発なディスカッションを行いました。

「国際みなとまち大学リーグ」（Port-City University League, PUL）は、世界の港湾都市にある大学が、海洋を軸に学術・文化・産業等さまざまな視点からアプローチし、市民も含めて交流することを目的として、平成 18 年に第 1 回会合を横浜で開催しました。その後、インドのチェンナイ（平成 19 年）、ポルトガルのリスボン（平成 20 年）において交流を重ね、本年は再び横浜でのセミナー開催となりました。PUL への参加大学は、サザンプトン大学（英国）、ホーチミン市工科大学（ベトナム）、上海交通大学（中国）、リスボン大学（ポルトガル）、サンパウロ大学（ブラジル）、釜慶大学（韓国）、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）、インド工科大学（インド）、横浜市立大学および横浜国立大学、そして新たに今回加盟したアレクサンドリア大学（エジプト）、イスタンブール工科大学（トルコ）の 11 カ国 12 大学です。

国際セミナー第 1 日目は「港湾と海洋の諸問題」と「港町と海洋教育」の 2 セッションが開催され、「海賊対策と国際協力」（田中利幸横浜国立大学教授）、「日本漁業の管理と保全」（松田裕之横浜国立大学教授）、「ベトナム南部港湾開発計画」（Nyuyen Thao ホーチミン市工科大学准教授）

セミナー講演者と主催者の集合写真

及び各大学における海洋に関する教育研究への取り組みが紹介され、質疑応答が繰り広げられました。第２日目は、「みなとまちの歴史と文化」をテーマに講演と議論が展開され、横浜開港資料館・平野正裕主任調査研究員の特別講演や参加大学からそれぞれの港と都市の歴史と文化に関する発表が行われました。

海洋とみなとをテーマに工学･環境科学･社会科学・人文科学それぞれの観点からの議論が融合し、また時には反発し合い、何か新しいものを創造する原動力を感じました。

国際セミナー終了後の円卓会議では、今後更に多くの大学が PUL に加盟し、活動が活発化することを期待して、PUL のロゴマークを図１のように決定しました。次回の PUL 会合は、来年カナダのバンクーバーで開催される予定です。

函館国際水産・海洋都市構想

函館国際水産・海洋都市推進機構 機構長 伏谷（ふせたに） 伸宏（のぶひろ）

函館開港 150 年

函館は150年前の安政六年(1859年)に開港した。開港に伴い、フランス、イギリスなどの多くの外国艦船が入港を繰り返すようになり(図1)、諸外国領事館も軒を連ねたという。一方、特産品の昆布を始め、アワビ、イカ、ホタテ、ナマコなどが主に中国や香港に輸出されるなど、国内ばかりでなく外国交易が活発化した。今でも残るカトリック教会などが建設されたのもこの頃である。さらに、日露戦争の勝利、北洋漁業の隆盛、青函連絡船開通により函館は栄えたが、第二次大戦後の北洋漁業の不振に加え、連絡船の廃止が拍車をかけ、繁栄を享受した函館は、衰退の一途を辿った。なお、空港の開港により観光に活路が見いだされるかと思われたが、観光客数もこのところ年々減少している。

図１：明治初期の函館「函館真景」(函館中央図書館蔵)

国際水産・海洋都市構想

このような状況を打開すべく、平成 14 年に産官学民の有志により、函館海洋科学創成研究会が設立され、豊富な水産資源の研究・開発による産業の創成、観光産業の振興などによる函館市の活性化について検討が開始された。翌年には、函館国際水産・海洋都市構想が策定され、研究会が本構想推進協議会となり、「地域再生計画」の認定、「オーシャンウィーク」の開催、「函館市臨海研究所」の開所など、構想実現に向けて活動を行ってきた。

一般財団法人　函館国際水産・海洋都市推進機構の設立

本年４月、前述協議会を改組して法人格を持つ機構を設立し、７年間に渡る議論で醸成された構想の具現化に向けた一歩を踏み出した。本機構は、函館に立地する北海道大学大学院水産科学研究院、はこだて未来大学、函館工業高等専門学校、北海道立工業技術センター、道立函館水産試験場などの研究者の交流を計り、水産・海洋研究プロジェクトを立ち上げ、国内外の研究者との情報交換や共同研究の仲介あるいは国際会議の誘致などを図って、函館が国際的な水産・海洋研究の拠点都市に変容することを推進する。

国際水産・海洋総合研究センター

上記構想の実現のため、旧函館ドック跡地に建設される研究センター(平成 25 年供用開始予定･図 2)において、異分野融合形の研究チームによる、函館に豊富な海藻などの水産資源を対象とした研究・開発を基盤とした新産業の創成を目指す。このセンターでは、官民を問わず国内外から研究者を招聘し、地元研究者との共同研究を遂行してもらう。得られた研究成果を広く世界に発信して、多くの学会や国際会議を誘致する。研究や会議のために多数の研究者とその家族が函館を訪れるようになり、街の活性化に役立つものと確信する。

詳しくは、本機構のホームページを参照されたい(http:// www. marine- hakodate.jp)。

図２：研究センターの機能

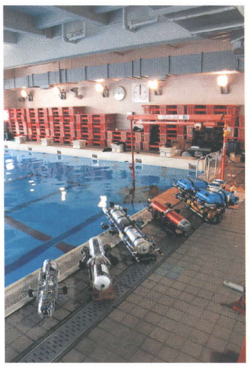
第３回水中ロボットフェスティバル開催報告

水中ロボフェス実行委員会幹事（大阪府立大学・准教授）有馬（ありま）　正和（まさかず）

平成21年5月31日（日）、海上自衛隊阪神基地隊（兵庫県神戸市東灘区）の屋内プールにおいて、「第３回水中ロボットフェスティバル（水中ロボフェス2009）」を開催した。本イベントは、海で活躍する水中ロボットを間近に見たり、魚型ロボットを製作・プログラミングすることによって、青少年に水中ロボットの動きやしくみを理解してもらい、水中ロボットの果たす役割や重要さ、ものづくりの楽しさを知って船舶海洋工学・水中技術への関心を高めてもらうとともに、水中技術に係わる技術者・研究者の交流を深めてネットワークの構築を図ることを目的としている。

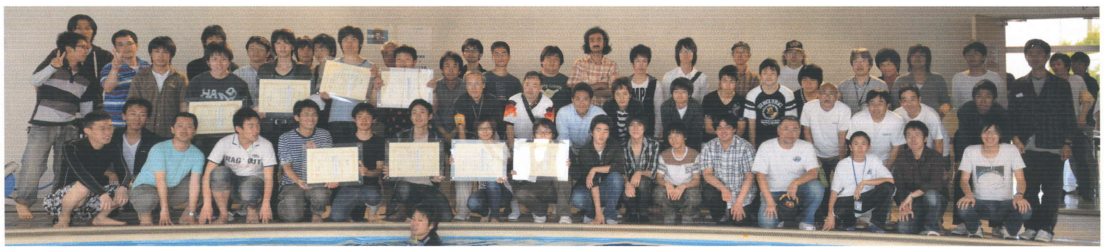
今回のイベントでは、(1)AUV（自律型水中ロボット）部門、フリースタイル部門、アクアロボット部門の水中ロボット競技会、(2)水中ロボットの展示・デモンストレーション、(3)水中ラジコン／カメラ付きROV（有索式水中ロボット）の体験操縦を行った。

水中ロボットの競技会は、平成18年10月にTechno-Ocean 2006のイベントとして「第１回水中ロボットフェスティバル」を開催して以来、神戸の「水中ロボフェス」と東京の「水中ロボコン（水中ロボットコンベンション）」を交互に開催している。競技規則に基づくコンテストは、平成19年12月の「第２回水中ロボットフェスティバル」で初めて取り入れられたが、そのときはゲート通過などの課題をやり遂げたAUVは一台もなかった。回を重ねるにつれて少しずつ進歩が見られ、今回は、前回の水中ロボコンin辰巳'08（平成20年11月）から半年ほどの間にAUV部門の水中ロボットの性能が飛躍的に向上していることに驚かされた。まだまだ競技会は無理だろうということで水中ロボットの祭典と名付けられたイベントであるが、今や競技会と呼んでも決して恥ずかしくないレベルになってきたことを大変嬉しく思う。



AUV部門ロボット勢揃い

次回は、Techno-Ocean 2010のイベントとして、平成22年10月16日（土）に神戸市立ポートアイランドスポーツセンターにてAqua Robot Competition（水中ロボット競技会）を開催する。今度は、AUVたちがどんな能力を見せてくれるのか、今からとても楽しみである。



第３回水中ロボットフェスティバル集合写真

Techno-Ocean 2010

今はじまる海洋新時代　～すばらしい海を次世代のために～

会　期　2010年（平成22年）10月14日（木）～16日（土）
会　場　神戸国際展示場
主　催　テクノオーシャン・ネットワーク
共　催　（独）海洋研究開発機構　日仏海洋学会　IEEE/OES日本支部　MTS日本支部
（財）地球科学技術総合推進機構　神戸市　（財）神戸国際観光コンベンション協会

編集室から

海洋基本法制定後、日本国内で海洋に関する様々な動きが加速してきたことは、肌身で感じるところである。我が国の国益を重視して持続的な発展を目指す視点に立つことは大変重要なことであるが、我々の住む有限な地球星の大半を占める海洋を論じる時には、先進国家として人類共通の貴重な財産を扱う視点を常に中心に据えて、責任を持たんとすることを自らの肝に銘じたい。（藤）

Techno-Ocean News No.34　2009年7月発行（年4回）

発行：テクノオーシャン・ネットワーク（TON）
〒650-0046　神戸市中央区港島中町6丁目11-1
（財）神戸国際観光コンベンション協会内
TEL 078-303-0029 FAX 078-302-1870
URL：http://www.techno-ocean.com
e-mail：techno-ocean@kcva.or.jp